

令和元年気良歌舞伎十五周年記念公演

伊勢音頭恋寝刃 古市油屋店先の

場

配役

福岡貢

若衆

油屋お紺

若衆

料理人喜助

仲居

仲居万野

仲居

油屋お鹿

仲居

藍玉屋北六実八岩次

徳島岩次実八北六

藍玉屋次郎介

(幕開く。貢、坐っている)

貢 みつぎ 先立さきだつて藤浪ふじなみ様より仰せ聞おほきけらし本国阿波ほんごくあわの伯父御大学おじごだいがく殿どのに加担かたんの侍さむらい、徳島岩次とくしまいわじ、まつた城下じょうかの町人ちやうにん、藍玉屋あいだまや

北六きたろくがこの古市ふるいちに入り込んだいここと。ひつ捕とらえ一詮議ひとせんぎとは思おもえども、人相骨柄にんそうこつがら藤浪ふじなみ様より聞きいたとは拔群ばつぐんの相違そうい、なれど・・・折紙おりかみを騙かたり取おつたは奥おくの阿波あわの客きやく。今宵こよいはここは動うごかれぬわえ。

(奥にて万野)

万野 まんの ナニ貢みつぎさんがおいないまんしたとえ。今いまそこへ行いてお断ことわりを言いおうわいなあ。

(奥より万野出る)

万野 まんの マア貢みつぎさん、ようおいないまんしたなあ。

貢 みつぎ 万野まんのか。久ひさしう会あわなんだな。

万野 まんの 毎晩まいばんのおいでようすの様子きは聞きいてはいたれど、このじゆうから奥おくのお客きやくでとんと座敷ざしきが離はなれぬによつてマアようお目めにもかまりませなんだが。貢みつぎさん、お生憎あいにくじゃが今夜こんやはお紺おこんさんはならぬぞえ。

貢 みつぎ そんならやつぱり阿波あわの客きやくで。

万野 まんの さいなあ。今日きょうは芝居しばいの初日しよにちでお客きやくと連れ立つて見物けんぶつに行ゆかしゃんしたが、帰かえりは大方大坂屋おおかたおおざかやで立たてでござんしよう。

貢 みつぎ そうかあ。イヤあおこんのな、ちよつとお紺あに逢あわねばならぬことがある。我わが身みちやつと働はたらいてたもらぬか。

万野 まんの そりゃモウお馴染なじみのお前まえのことじゃによつて、どうぞしてあげたいと思おもうているなれど、お客きやくは阿波あわのお侍さむらい。モウ

モウねぢみやくで粋すいというこは芥子けしほどもござんせぬ。所詮しよせんちよつとの首尾しゆびもならぬであらうわいなあ。

貢みつぎ そうか。マアそりやあ所事しよごとがないなあ。イヤあのなら、今宵こよいはちよつとここで待ち合わせる人ひとがある。最前さいぜん聞けば奥おくで舞

の会かいがあるとのこと。その舞まいの会かいをちよつと覗のぞかしてはたもらぬか。

万野まんの ソリヤお前まえならぬぞえ。今いまも言ゆうとおり、奥おくのお客きやくはそれはそれは氣きの狭せまいお人ひとでな、他ほかのお客きやくと座敷ざしきをひとつにし

たなれば大抵たいていや大方おおかたうるさいことじゃござんせぬ。必ずかなら必ずかなら舞まいの座敷ざしきへ顔かおなど出だしてくださんすなえ。

貢みつぎ そうか。それもならぬか。アそんならな、ちよつと呑のみたい。ここへ酒さけを持もつてきてたも。

万野まんの マアせつかくではござんすが、今夜こんやは酒さけも肴さかなも山やまでござんす。ああモウ一文いちもんにもならぬお客きやくの相手あいてをしているという

のはマアほんにうつとうしいこつちやなあ。ホホ、ホホホ……。マアほんにわたしとしたことが。貢みつぎさん、お氣きに障さええ

られなえ。ア、そうじゃ、お前まえそれほど此処ここに居いたいということなれば誰たれぞ代わり子かこをよばしやんせいなあ。

貢みつぎ ハハ……。万野まんのとしたことがソリヤマ何を言ゆうのじゃ。わしにはお紺おこんというものがあいながら、何なんでマア代わり子かこを……。

万野まんの ソリヤモウお前おまえとお紺おこんさんの仲なかはこの古市ふるいちで誰たれ知らぬものもないけれど。お前おまえがたつてここに居いたいということなれば

誰たれぞ代わり子かこを呼よばしやんせと、コウ言ゆうているのじゃわいなあ。

貢みつぎ マそう言いわれてもわしが代わり子かこを呼よぶわけにはいかぬわい。

万野まんの アアそうでござんすか。そりやマア代わり子かこを呼よばぬということなればマアお客きやくにすることはならぬによって、どうぞ

もう帰かえつてくだしやんせ。

貢みつぎ マそんな意地いじの悪いわること言いわんと、ちよつとここへ置お置いてたも、ナ……。

万野まんの そんなら代わり子かわりこを呼んでくださいませんか。

貢みつぎ なんでマアそのようなことが……。

万野まんの 去いんでくださいませんか。

貢みつぎ イヤイヤ……。

万野まんの アノ代わり子かわりこを呼んでくださいませんか。

貢みつぎ イヤ……。

万野まんの モシ貢みつぎさん。どうじゃぞいなあ。

貢みつぎ ア・・モウ……。どうなとしたらよいわいのう。

万野まんの エ、そんならお前おまえアノ代わり子かわりこを呼ばしよませんか。アノほんに代わり子かわりこを呼ばしよませんか……。マア貢みつぎさん、ようおい

なんしたなあ。

貢みつぎ 現金げんきんなやっちゃなあ。ハハハ。

万野まんの ハハハ。アアそうでござんすか……。そんならアノ貢みつぎさん、お腰こしのものをお預あずかりいたしましょうか。

貢みつぎ イヤこれは滅多めったには預あずけられぬ。

万野まんの なんじゃいなあお前おまえも。昨日今日きのうけふのお客きやくのようにもない。この伊勢いせの茶屋ちややでお遊あそびなさるのに、お腰こしのものを預あずかるのは習ならわし。ア、そうでござんすか。マアお腰こしのものが預あずけられぬということなれば、モウモウお客きやくにはならぬによって、どうぞもう去いんでくださいせんせ。

貢 みつぎ イヤそんなことを言わず、ちよつと此処へおいてたも。

万野 まんの そんなら預けてくださんすか。

貢 みつぎ イヤこれは預けるわけにはいかぬわい。

万野 まんの 去んでくださんすか。

貢 みつぎ イヤアノ。

万野 まんの 預かりましょうか。

貢 みつぎ イヤこれは。

万野 まんの 去んでくださんすか。

貢 みつぎ サア。

万野 まんの サア。

二人 サアサアサア。

万野 まんの 貢さん、モウ暑い時分じゃ、どうじゃぞいなあ。

(奥にて喜助)

喜助 きすけ アアイヤ、そのお腰のものは、わたくしがお預かりいたしましょう。

(奥より喜助出る)

貢 みつぎ そちや料理人の喜助じゃないか。

喜助 きすけ イヤモウこのじゅうはなんやかやと忙しゅうてお目にもかかりませなんだ。

万野 まんの 喜助どん。そんならお前が、お腰のものを。

喜助 きすけ ハテ貢様も今でこそ御師なれど元はお歴々のお侍。女子のこなたに大切なお腰のものを、お預けはなさるまい。身

こそ卑しい料理人なれど男の端くれ。わたくしが預かる。へいわたくしがお預かりいたしまするほどにモウお氣遣い

には及びませぬ。

貢 みつぎ ウンそんならそちに預けるほどに……。

喜助 きすけ へい。

貢 みつぎ この品はな、大切な一腰。粗相のないよう頼んだぞや。

喜助 きすけ イヤモウしつかりとお預かりいたしまする。

万野 まんの アア仲居のわたしに預けもせず料理人の喜助どんに預けるとはマアほんに気の悪いこつちや。仲居のわたしはあつても

無うても……喜助どん、しつかりとお預かり。ア、そうじゃ。誰ぞアノ代わり子を呼ばねばならぬのじゃが、マアそ

れは誰が良かろうなあ貢さん。

貢 みつぎ マア誰でも良いわいのう。

万野 まんの そんならアノ初子にしようか……アノ花子にしようか……。

(奥にて仲居)

仲居 なかい 万野、万野。

万野 まんの
アア今行くわいな。梅子がええか……。竹野がええか……。アア今行く……。エエハテせわしない。今行くわいなあ。

そんならすぐに代わり子を呼ばしやんすほどにちよつと待つててくだしやんせ。

貢 みつぎ
ドレわしも奥へ。

喜助 きすけ
ア申し若旦那。ちよつとお待ちなされてくださりませ。わたくしがお話申したいことがござりまする。

貢 みつぎ
アノわしにか。

喜助 きすけ
へイマア、お聞きなされてくださりませ。マア今更申し上げまするのも如何なれど、私の親どもは貴方様の親旦那様

へ中間奉公。親旦那様には阿波より鳥羽へ御逼塞。それゆえ親どもも奉公を引き、老いの枕辺へわたくしを呼び寄せ、

福岡孫大夫様の御養子貢様は我ら親子には古主の若旦那。随分ともに心にかけて忠義を尽くせとの親どもの遺言。

モシ、モシ若旦那。こうして毎晩毎晩このところへおいであつては御身に災いを招く道理。トサア猪口才な喜助めが

貴方様へのご意見、モウモウ必ずお気に障えられてくださりまするな。

貢 みつぎ
下様に似合わぬ古主の恩を忘れぬそちが意見。悪しゅうは聞かぬ。かたじけない。その心を知るゆえに最前預けし

その一腰。何を隠そうその一腰は、青江下坂じゃわいのう。

喜助 きすけ
そんならこれが。

貢 みつぎ
その刀は手に入ったれども肝心の折紙をすり替えられ、その詮議をしようために毎晩毎晩ここへ来るのを必ず

放埒ではないほどに心遣いは無用にしやれ。

喜助 きすけ
左様なれば、その折紙を騙った奴らが、この油屋へ。

貢 みつぎ サしかとは知れねど……コレ。

喜助 きすけ シンそんなら奥の。

貢 みつぎ コレ。大事な詮議、密かに密かに。

喜助 きすけ ヘイ。左様なれば若旦那、久しぶりにこの喜助の包丁で一口おあがりなされませ。

貢 みつぎ そんなら喜助。

喜助 きすけ 若旦那。

貢 みつぎ サア、来い来い、来い。

喜助 きすけ マアマア一口おあがりくださりませ。

貢 みつぎ 久しぶりに我が身の包丁で一口やろうか。

喜助 きすけ お久しぶりございました。マアなんやかやと忙しゅうてお目にもかかりませんで。サアこちらでございませ。サアサ

ア。マアおかわりもなく……。

（貢、喜助上手に入る。北六奥より出る）

北六 きたろく 今聞いていれば貢が差してきたは青江下坂。この間に中身を取り替えて……。こうしておけば差していくのがこの

ナマクラ。後に残るが青江下坂。こうしておけば、おっとよしよし。

（北六奥へ入る。喜助上手より出る）

喜助 きすけ 人が見ているとも知らずに悪いことをするやつちゃ……。イヤイヤお帰りなざる時、間違えたつもりでコレをお渡し申

せば、やつぱりコレが正真しょうしんの青江下坂あおえしもさか、後に残るあとがこのナマクラ。こうしておけば、おつとよしよし。

（喜助奥へ入る。貢、上手から出る）

貢　ハア万次郎様はなにしてぞ。もうみえそうなものじゃなあ。

（奥にてお鹿）

お鹿　ナニ貢さんがおいなんしたとな。今そこへ行くになあ。

（奥よりお鹿出る）

貢　アお鹿か。

お鹿　貢さん、ようおいなんしたなあ。

貢　久しゅう会わぬが変わることはないか。

お鹿　アイよう問うてくだしやんした。貢さん、わたしやきつと嬉しいぞな。

貢　ア、そんならアノ。万野が我が身を。

お鹿　アイ。お紺さんという馴染みのあるお前になんのかのと言うたは、みんな私が悪性なれど。どうも思い切られぬゆえ、

たびたび上げた文の返事、見るたびごとにわたしの嬉しさ。モシ貢さん、推しておくれいなあ。

貢　イヤなんじゃやら、おかしなもの言いう。我が身から文を貰うた覚えもなし。またこつちから返事をした覚えもな

いわい。

お鹿　エ……。ホホホ……。オオ笑止。ほんにマアわたしとしたことが、今ここで改めて言わいでも良いことなれど、お紺

さんと訳つけて私に逢うてやろうと言うてくださんした時の嬉しさ。どうなとしてお気に入ろうと思うて、お前の方から言うておこしなさるたびごとに、ただの一度も返事あげなんだことはござんせぬ。これもみんな、お前に可愛ゆがつて貰いたさ。モシ貢さん、推しておくれいなあ。

貢 みつぎ ハテマア合点のゆかぬ言葉の端々。シンそりや一体なんのこつちや。

お鹿 おしか エ。なんのことは貢さん。お前、わたしが言うてあげたこと、得心してじゃないかいなあ。

貢 みつぎ そりや何をいのう。

お鹿 おしか 何をともう白々しい。あれほど確かな文の返事、よこしたじゃないかいなあ。

貢 みつぎ そんな事こちや知らぬわい。

お鹿 おしか アレ、アレマアあんなこと・・・。あれほど確かな返事よこしておいて、それを今更知らぬ覚えがないとは、そりやむごい、胴欲じゃ、胴欲じゃ、胴欲じゃ、わいなあ。

貢 みつぎ さまざまな事を言いよるわえ。

(奥よりお紺出る)

貢 みつぎ そちやお紺か。

お紺 おこん 貢さん、きつう派手な事なあ。

(奥より皆々入る)

貢 みつぎ アアコレお紺。そんなら我が身は内に居たのか。

お紺 おこん
知れたこといなあ。

貢 みつぎ
その内に居るものが、まだ戻らぬと何で嘘を言わしたのじや。

お紺 おこん
それを私が知ろかいな。みんなお前の心柄じゃわいなあ。

貢 みつぎ
ナニわしの心柄とは。

お紺 おこん
このじゅうから阿波のお客で間違おうて会わぬを幸い、ちゃんと代わり子を呼ばしやんした。ほんに殿達ほど水臭いも

おまえ
のはない。モシ岩さん、お前もそうでござんしようなあ。

岩次 いわじ
どうしてどうして。身どもはそんな無茶はせぬてや。ノウ北六。

北六 きたろく
そうともそうとも。こちのような素直な客も少なからうわい。

次郎助 みつぎ
また貢のように、ちよくちよく顔を変えるのも面白からうて。

若衆 きやく
こういうお客のことを、この里では箒客と申します。

岩次 いわじ
ナニ箒客。

三人 ほうききやく
箒客。箒客。ハハハハ……。

貢 みつぎ
アアコレコレお紺。アノナお鹿はわしが呼んだのじゃない。我が身にどうしても逢わねばならぬことがあるにやうて、
万野にお紺に逢わせてくれというたら、今宵もそなたはならぬとやう。そんならなちよつとここで待ち合わせをする人が
あるにやうて此処へおいてたもと言うたら、代わり子を呼ばねば去ねという。ぜひのうマ誰でもええわと言うたらな、コ
レ、コレ見てたも。ホホこんなものをおこしよつたわいのう。

しかろう。したがなんぼ蓼たででもへちものでも切れるところは切れやんす。それじゃによって、この伊勢参宮いせさんぐうののぼりくだ

りの人が何といわしやんす。オオソレソレ向こうへ行くのはアリア油屋のお紺あぶらや おこんじゃないか。マアお紺はええ器量きりょうじゃな

あ。ええ女子おなごじゃ。イヤイヤアノお鹿もええ女子おなごじゃ。お鹿も良いがお紺おこんも良い。お紺も良いがお鹿も良い。鹿さん紺さ

ん仲良しさん。ここばかりじゃやてかんせとサア相ノ山あい やまではなけねども。ついに一度もお客きやくに離れたことはないぞえ。

それにわたしやこの貢さんゆえに、大勢のお客きやくさんに無心のたらたら言いさがし、紋日物日の着物から、着替えの寝間着ねまき、

櫛くしこうがい、工面くめんのあるたけ仕尽しつくして、わたしや貢みつぎさんに、ハイいれあげたわいなあ。

貢みつぎ コレ、コレコレコレ、コレお鹿。我が身はソリヤ一体何を言うのじゃ。

お鹿

貢みつぎ エ。女子おなごと思うて大概きのことは聞き流しにもするが、大勢の前でこの貢みつぎに金をおこしたとはソリヤ一体何を言うのじゃ。

お鹿 何を言うとは貢みつぎさん。確かな証拠はお前おまえの方から文ふみよこしたじゃないかいな。

貢みつぎ 文ふみ・・・そんなもの出した覚えはないわい。

お鹿 何を言わしやんす。そんならその文ふみここへ持ってきてマア皆さんの聞きかしゃんす前で読んでも大事だいじござんせぬかえ。

貢みつぎ アアあるならここで読んでみい。

お鹿 アアそうでござんすか。そんならここに今持ってきてきますわいな。

貢みつぎ はよ持ってこい。はよ持ってこんかい。なんでわしがそんな文・・・。

お鹿 おちよぼや・・・おちよぼや・・・。

貢 みつぎ 早うもつてこい。早うもつてこい。コレ早うもつてこぬか……。

お鹿 おしか ハテせわしない。今とつてくるわいなあ。

貢 みつぎ 何を言うのじゃ……。

おしか
(お鹿奥へ入る)

岩次 いわじ せつかくここで飲もうと思うたに、面白くないことで裏に落ちた。コレ枕をもて枕をもて。

おしか
(お鹿奥より出る)

お鹿 おしか サアサアとつてきたわいなあ。とつてきたわいなあ。

貢 みつぎ サアサアあるなら出してみい……。

お鹿 おしか サアサアよう聞いてくださんせ……。

貢 みつぎ アア聞こう……。

お鹿 おしか アこれでござんす。よう聞いてくださんせ。御文おふみくだされ、浅あからぬ御心おこころもじのほど嬉うれしく存ぞんじ候そうろう。ちと手づかえの

事御座候ごいせうこうまま、無心むしんながら金子きんす五両お貸かし下され、ソレよう見てくださんせ。その次つぎがな……これじゃこれじゃ三両。

ようござんすかえ、それからナ終しまいがこのとおりソレ二両。都合つごう合わせて十両という金子きんす。文ふみの来るたびごとにただの一

度も断り言うたことはないぞえ。それを今更いまさら知らぬ覚えおまえがないとは、そりやお前おまえあんまりじゃ、あんまりじゃ……あ

んまりじゃわいなあ。

貢 みつぎ コリヤみな、わしの手じゃない。偽筆にせひつじゃわいのう。

おしか
お鹿

エ。

みつき

おしか

もとより金の無心むしん言うた覚えはない……が。これには誰ぞ、仲立ちなかだがあるであろう。

おしか

お鹿

エ……仲立ちなかだはあるわいなあ。

みつき

おしか

その仲立ちなかだは誰じゃ。

おしか

お鹿

その仲立ちなかだは。

みつき

おしか

その仲立ちなかだは。

おしか

お鹿

その仲立ちなかだは。

みつき

おしか

その仲立ちなかだは。イヤその仲立ちなかだは。

おしか

お鹿

ヤ……仲居なかいの万野まんの。

みつき

おしか

ナニ。万野まんのじゃ……。万呼べ。

おしか

お鹿

今呼ぶわいなあ。まんや……。

みつき

おしか

万呼べ……。まんや……。

おしか

お鹿

万呼べ、万呼べ……。万野まんのを呼べ。

みつき

おしか

万や、万や、万や……。

おしか

お鹿

（奥から万野まんの出る）

貢 みつぎ コレコレコレ万野、ちやつと話を聞いてたも……。万野……。コレコレ。

お鹿 おしか コレ万野。話を聞いてたも……。万野……。コレコレ。

万野 まんの ちよつと待つてくださんせいなあ。そのように両方から万野、万野と言われては万野が真ん中でしわくちやになつてしま

うじゃないかいなあ。ママちよつとお待ちくださんせ。今話を聞くによつて……。ママちよつとちよつと……。

まあお鹿さん。こりやマアどうしたことでござんすえ。

お鹿 おしか コレ万野。聞いてたも。あいな貢さんから文のくるたびごとに初手が五両、中が三両、終いが二両。都合合わせて十両

という金子をみんなそなたに渡したが、あのお金はどうしやつたぞいなあ。

万野 まんの マ何のことかと思うたら、そのことでござんすか。それなればお鹿さん、案ずることはござんせぬ。お前からそのお金、

受け取るたびごとに、みんな貢さんに渡してあるがな。

貢 みつぎ コレ、コレコレ、コレ万野。我が身は一体何を言うのじゃ。エわしが一体いつお前からそんな金受け取った。

マア、お前もマア物忘れのきついお人じゃなあ。あれほど礼言うて確かに受け取ったやないかいなあ。

万野 まんの 貢 みつぎ エエそりや一体いつのことや。

エ、後の月のはじめの頃に。

万野 まんの 貢 みつぎ エ、サそりやどこで。

ア……。初手の五両が、ア、離れ座敷。

万野 まんの 貢 みつぎ ナニ離れ座敷……。

万野まんの 中の三両が段橋の上り口。終しまいの二両が奥座敷おくざしき。みんな都合あわせて十両というお金……。

貢みつぎ アレ。

万野まんの アレ。

二人 アレアレアレ。

貢みつぎ あんなことを言いよるわえ。

万野まんの あれほど確かに渡してあるものを今になってお前おまえそのようなことを言わしやんすりや私が中に入ってなんと……。

アア、聞きこえた。こりやなんじゃな。お前おまえお紺おこんさんの前じゃと思うてそのように知らぬ顔おまへしていやしやんす。ソリヤお前

悪いぞえ、悪いぞえ。悪いぞえ……ここが……ナア。可哀おしかそうにお鹿としはさんおまへは年端もいかぬに頭おまへのものから着るものま

で、みんなお前おまえにいれあげたを、それを今になって知らぬの何のと白々しい……。顔おまへに似合おまへわず、お前おまへもよつほど、し

らにせなお方おまへじゃな。

貢みつぎ 覚えおまへのない、この貢みつぎに……。わりや言おまへいかけをするのじゃな。

万野まんの ナニ言おまへいかけ。言おまへいかけとは何でござんす。いえいなあ貢みつぎさん、言おまへいかけとは何じゃいなあ。お前おまへそのように知らぬと言

うていやしやんしても、これこのように確むしんかな無おまへ心おまへ状おまへが書おまへいてあるじゃないかいな。

貢みつぎ コリヤみなわしの手おまへじゃないわい。

万野まんの ホホ……ササマアこれが……お前おまえの手おまへやら、またお前おまえが誰たれぞに頼おまへんで書おまへかせてよこしなさんしたものやら、それを私

が……知おまへったことかいな。

貢 みつぎ

ンツ。

万野 まんの

オオこわ……。オオこわ。お前おまえそのように怖い顔をして、青筋あおすじ立てて……。腹はらが立ったのでござんすか。アアそうでござんすか。マア腹はらが立つのなら、マア打うつなり叩たたくなり、思うようにしてくださいませ。マどうなとしてくださいませ。ナおまえお前は殿御とのご、わたしは姫御前ひめごぜ。殿御とのごに負けるは女子おなごの習ない。ナ……。サ打うつなり叩たたくなりしてくださいませ。サ……。どうなとしてくださいませ。サ、どう……。どうな……。どう……。貢みつぎさん、どうなとして。

貢 みつぎ

女おんなを相手おとなげに大人気おとなげない……。この礼れいは、きつと言うぞよ万野まんの……。覚えていよ。

万野 まんの

じやかいなあ。

お鹿 おしか

コレ万野まんの、よう言うてたもつたな。女郎じよろうが客きやくを騙だますは当たり前あたりまえ、客きやくが女郎じよろうを騙だますとは……。あのここな、あべこべ男おとこめ。

北六 きたろく

なんとみな聞きいたか。この伊勢いせという所むしやうは無性むしやうに銭金ぜにかねを欲ほしがるきと聞きいたに違ちがわず、女郎じよろうを騙だまして金かねをとるとはハテ変へんわつたことが流行はやりる国くにだ。

次郎助 じらうすけ

とりわけ御師おんしのその中でも低ひい奴やつらは銭金ぜにかねを見みるとびよこびよこするが、大方おおかたあれが伊勢いせ乞食こじきであろうわい。

二人 ふたり

伊勢いせ乞食こじき。伊勢いせ乞食こじき。

皆々 みな

ハハハ……。

貢 みつぎ

身み不肖ふしょうなれども福岡ふくおか貢みつぎ。女めを騙だまし金取かねとろうや……。バババ……。馬鹿ばかなこと。

お紺 おこん

そう潔白けつぱくには言いわれますまい。

お前、国へ戻つて侍になると言わしやんすが、わたしや侍が嫌いじゃわいなあ。

貢 侍が嫌いとは。

お紺 私の父さんも元は侍。傍輩衆の讒言とやらで永々のご浪人。常々父さんのおつしやるには必ず必ず侍と二世の約

束すなどのお言葉。それじゃによつて、わたしや侍は嫌いじゃわいなあ。

貢 そんなら初手からなせ言わぬ。今になつて侍が嫌いとは。

お紺 サはじめから言おうにも、お前は御師。何時身ままになろうとも御師をやめさせ町家の住まい。町人と夫婦になれば父

さんのお言葉もたつ。それじゃによつてわたしや侍は嫌いじゃわいなあ。

貢 おが屑も言わば言わるる。そんならどうでも、この貢の女房になることは。

お紺 嫌じゃないぞえ。お前が侍をやめ、町人になつてくだんさんすりや、たとえ貧しい暮らしでも得心でござんすほどに、

町人になつてくださんせ。

貢 なんてそれが今更できようぞ。

ならぬかえ。

貢 ヤヤあの。

お紺 イエなりませぬかえ。お前がならずば、わたしも嫌。モシ岩さん、そうじゃないかいなあ。モシ岩さん、岩さん・・・寝

た顔せずと、起きいなあ。

貢 よう言つた。我が侍が嫌いなら、わしも町人は大嫌いじゃ。ソノその嫌いな侍によつて今まで付きおうてくれた、

礼を言うぞよ、礼を。

万野 まんの アアもし貢さん。大事のお客のあるお紺さんに指など差いでくださすな。もうお前のような人は、ここにおくことは

ならぬによつて、もうサア早う去んでくださんせいなあ。

貢 みつぎ お前、お前にそんなこと言われんでも、わしのほうからこんな家は去んでやる。最前お前に預けた腰のものを出してた

も。

万野 まんの お前の腰のものなどわたしや知らぬわいなあ。

貢 みつぎ 最前お前に預けたやないかいな。

万野 まんの お前、喜助どんに預けたじやないかいなあ。

貢 みつぎ ア・・・アノ喜助呼べ。

万野 まんの お前お呼び。

貢 みつぎ お前呼べ。

万野 まんの お前お呼び。

貢 みつぎ お前呼べ。

万野 まんの エエお前お呼びい。

貢 みつぎ ああモウ、喜助、喜助。

(喜助奥から出る)

喜助 きすけ　へいお呼びでございまするか。

貢 みつぎ　わしの腰の、腰のものを持ってこい。早う。

(喜助奥から刀かたなを持っってくる)

喜助 きすけ　へい。お腰のものをございまする。

(貢出る)

お紺 おこん　貢さん、待たしゃんせ。

貢 みつぎ　なんぞ用か。

お紺 おこん　もうこれぎりで・・・ござんすぞえ。

貢 みつぎ　これぎりも、すさまじいわえ。ようもようも・・・。

万野 まんの　とつととお帰り。

(万野、戸を閉める)

貢 みつぎ　アイタ。

(貢、花道へ)

万野 まんの　マアようようのことで貢みつぎが帰っていったわいなあ。サみなさん座敷ざしきを替えて飲みなおしてくださいな。

(お紺、北六、岩次を残して皆奥に入る)

岩次 いわじ　お紺おこんでかしたでかした。よう貢みつぎを退のいてくれたな。

おこん そんなら今の様子をば。

岩次 寝た顔で残らず聞いた。サこれからは侍の女房じゃ、女房じゃ。

お紺 わたしや侍は嫌いでござんすほどに、わたしを女房にしようと思つてなら、町人になつてくださんせ。

岩次 すりや侍を捨て町人になれば、きつとそちや女房になるのじやな。

お紺 アイ町人になつてくださんすりや、女房になろうわいなあ。

岩次 しかと左様か。

お紺 オオくど。

北六 (実は岩次) コリヤ北六、恋が叶うて満足であらうのう。

岩次 (実は北六) 岩次殿、ありがとうございます。

お紺 エ、マアマア待つてくださんせ。わたしやとんと合点がゆかぬわいなあ。藍玉屋北六さんとはお前じやないかいなあ。

北六 (実は岩次) その不審もつとも。徳島岩次というのは、まことは出入りの町人藍玉屋北六。

お紺 そんなら阿波の御家中、徳島岩次さんとはえ。

北六 (実は岩次) いかにも拙者。蜂須賀大学様の仰せを受け、貢が古主万次郎より青江下坂を奪わん我らがたくみ。

お紺 それでとんと様子がわかつたわいなあ。したが私はお前に問いたいことがござんす。

岩次 (実は北六) なんなりと問うたり問うたり。

お紺 ほかのこともござんせぬ。お前の懐に大事そうに持っていやしやんす袱紗包み。そりや何でござんすえ。

岩次（実は北六）
こりや大切な折紙。

北六（実は岩次）
コリヤ。

岩次（実は北六）
イヤ・・・カカカ、神々さまのおまもりじや。

お紺
テモきつい嘘嘘。大方よその色さんの起請でござんしよう。

岩次（実は北六）
ハテめつそうな。

お紺
そうでなくばちよつと見せてくださんせ。

岩次（実は北六）
でもこれは・・・。

お紺
見せとうなければようござんす。そのかわりわたしやお前の女房になるのは嫌でござんす。

北六（実は岩次）
アアこりやこりや北六。お紺がこのように実を尽くすになぜものを隠すのだ。サア見せてやれ、見せてやれ。

岩次（実は北六）
ではこれを見せてもよろしゅうございまするか。

北六（実は岩次）
アア見せてやれ、見せてやれ。

岩次（実は北六）
ではコレを渡すほどに、奥へいてこつそりと開いてみや。

お紺
そんなら見せてくださんすか。

岩次（実は北六）
大事な、大事な。

お紺
うれしゅうござんす。これで私も・・・。

岩次（実は北六）
エ。

お紺 おこん 見せてもらおうぞえ。

岩次 いわじ (実は北六) きたろく 必ず人には見せまいぞ。

お紺 おこん ようござんすわいなあ。

(お紺奥へ入る)

岩次 いわじ (実は北六) きたろく 岩次様、どうもありがとうございます。

(万野奥から出る)

万野 まんの してやったわいな、してやったわいな。今貢 みつぎ が差 さ していった刀 かたな が岩次様のお刀 かたな。後に残 のこ ったが貢 みつぎ が差 さ していたこの

青江下坂 あおえしもさか。手 て も濡 ぬ らさず ず にせしめたはめでたい事 こと じゃござんせぬか。

岩次 いわじ (実は北六) きたろく 折紙 おりかみ といい下坂 しもさか まで手 て に入ったも、みんな万野 まんの が働 はたら き。祝 いわ いてひとつしめましようか。

三人 ヨーよよいよよいよよいよい。

万野 まんの おめでとうございます。

北六 きたろく (実は岩次) いわじ ヤアこりやちごうた、ちごうた。

岩次 いわじ (実は北六) きたろく ナニちごうたとは。

北六 きたろく (実は岩次) いわじ この刀 かたな は最前 さいぜん、身 み どもが中身 なみ を取り替 か えておいた偽物 にせもの じゃわい。

三人 エエ。

万野 まんの そりゃえらいことをしました。ちよつと待 まち ってください。喜助 きすけ どん、喜助 きすけ どん。

(奥より喜助出る)

喜助 きすけ へい。なんでござりまするか。

万野 まんの おまえ おまえ みつぎ みつぎ かたな かたな いわじ いわじ お前、貢の刀と岩次様のお刀と間違えて渡したぞや。

喜助 きすけ ママそれはまあえらい粗相をいたしました。

万野 まんの すぐに行て取り返してござんせ。

喜助 きすけ それは粗相そそういたしましたして、すぐに取り替えて参りますによつてごめんなされてくださりませ。

(喜助花道へ)

喜助 きすけ 何にも知らずに馬鹿め。

万野 まんの こりやまあ鈍どんなことをしたわいな。喜助きすけはもとは貢みつぎの家来筋じゃと言いっていましたわいなあ。間違まちがうたふりをして貢みつぎの

かたな 刀を取り替かえたに違ちがいない。わたしがちよつと取り戻かえしてきましようわいなあ。

二人 早はやういけ。早はやういけ。

北六 きたろく (実は岩次 いわじ) こりや万野 まんの、頼たのんだぞよ。

万野 まんの 合あ点てんじゃわいなあ。

(万野、花道へ)

万野 まんの 喜助きすけどん、喜助きすけどん。その刀かたなは違ちがうている。ちよつと……。

北六 きたろく (実は岩次 いわじ) 奥おくへ行て飲のみなおそう。

岩次（実は北六） そうしましよう、そうしましよう。

（北六・岩次奥へ入る。奥より）

仲居 サアサア音頭の始まり始まり。

（貢、花道より来る）

貢 コレ喜助、喜助。万野、万野……。

（貢、刀を確認する）

貢 アアモウ、コレ喜助、万野。

（花道より万野戻って来る）

万野 ア、貢さん。よい所で会うた。そのお刀は岩次様のお刀。間違うた、こっちへ返してくださいな。

貢 まずわしの刀を先に返してくれ。

万野 お前の刀は喜助どんが持っている。そっちの刀を返してくださいな。

貢 先にわしの刀を貰わねば、そちに渡すわけにはいかぬ。

万野 どうぞ、どうぞ、返してくださいな。

貢 頼むによってわしの刀を返してくれ。頼む。

万野 おまえの刀など、わたしや知らぬわいなあ。

貢 そんな、そんな意地の悪いことを言うなら、わしやこれでお前を打つぞよ。

万野まんの 貢みつぎ ア、どうぞぶってくださいな。ぶつなり叩くなり、気のすむようにしたうえで、どうぞその刀かたなを返してくださいな。

万野まんの 貢みつぎ アアコリヤわしが悪かった。謝る、謝るによって、わしの刀かたなを先に出したも。

万野まんの 貢みつぎ なんじやいな。お前おまえわたしを今、ぶつと言ったやないかいな。言う事とすることが違うやないかいな。

万野まんの 貢みつぎ ありや言葉ことばのはずみ。どうぞ、許してくれ。

万野まんの 貢みつぎ はよお打ちんかい。なんやのはよお打ち。エエもうはよお打ち。

万野まんの 貢みつぎ そういうならな、ほんまに打つぞよ。

万野まんの 貢みつぎ どうぞどうぞぶってくださいな。どうぞ……。

万野まんの 貢みつぎ ササはよ渡してくれ。

万野まんの 貢みつぎ それでぶつたのかいな。もつときつう叩きんかいな。

万野まんの 貢みつぎ エエモウ腹の立つ。そういうならな。こう。

万野まんの 貢みつぎ なんじやいなあ。お前おまえ、もつときつう打って、はよう気のすむようにして刀かたなを返してくださいな。

万野まんの 貢みつぎ ン……腹の立つ。それならなモウ。

万野まんの 貢みつぎ ア……アアいた。お前おまえ打つというたかて程というものがあるわいなあ。

万野まんの 貢みつぎ ナニ、お前おまえがお前おまえがきつう打てと……。

万野まんの 貢みつぎ アアいた……。イタ……。血……。お前おまえわたしをほんまに斬らしたな。

万野まんの 貢みつぎ エ。

万野まんの 人殺し。人殺し……。

貢みつぎ コレ……何を……。何をいうのじゃ。言うていうことと悪いことがある。なんでわしがお前を……。。

万野まんの ひとつろ……。

(貢、万野を斬る。お鹿斬る。暗転)

(岩次、障子を破り出る。貢、岩次、北六と立ち回り斬る)

(お紺出る)

貢みつぎ アお紺か。

お紺おこん 貢さん。お前のたずぬる大事の折紙。コレ見てください。

貢みつぎ エ……。ハツこりやこれ、折紙。そんならコレを手に入れようばかりに。

お紺おこん アイなあ。

貢みつぎ チエエ、かたじけない。こりやお紺、あなたの働きで折紙は手に入ったれども、肝心の刀をすり替えられ、殊に大勢

の人を殺めしうえは、所詮、生きてはいられぬ、この貢。お紺、さらばじゃ。

お紺おこん まってくださいんせ、まってくださいんせ……。

(喜助出る)

喜助きすけ 貢様、おけがはございませぬか。

貢みつぎ そちや喜助か。

喜助 きすけ

そのお腹立ちはごもつともながら、さいぜんあわ 最前阿波の客が、かたな なかみ 刀の中身を入れ替えるのをみましたゆえ、間違えたふりをして
お渡し申したその刀がかたな 正真の青江下坂でござりまする。

貢 みつぎ

エツ、そんならこれが。きすけ 喜助、灯しもて。オオまごうことなき、あおえしもさか 青江下坂。チエエ、かたじけない。

お紺 おこん

ふたしな 二品そろろう上からは。

喜助 きすけ

少しも早くお国おもてへ。

若衆

それをやっては。

貢 みつぎ

しもさか 下坂の切れ味。

喜助 きすけ

お見事。

(幕)